



プレゼントされた積木を机や床に広げて遊ぶ園児たち

山形県産木材を活用した優良モデルとなる民間施設を顕彰する「やまがたしあわせウッド賞」。その授与式が1月17日、パレスグランデール（山形市）で開かれ、愛真こども園（文屋正道理事長）に顕彰状が贈られました。

同賞は、県内の民間施設における木造化の取組を推進することを目的に、県が今年度創設したものです。このたび顕彰された愛真こども園は、白鷹町産のスギをふんだんに使用した木造施設。町内の大工や職人が集結し、町内一丸となって建築された、木の温かみや香りを実感できる施設になっています。

県産木材を有効活用した施設を顕彰 愛真こども園に「ウッド賞」



顕彰状を受け取る文屋理事長（左）

「やまがたの木」でいっぱい遊んでね 県産木材を利用した積木プレゼント



2月13日、愛真こども園において山形県産木材を利用した積木の贈呈式が行われました。

県が行う当事業は、生涯にわたって木に親しんでもらうことを目的とした「しあわせウッド運動」の第1弾となるもの。県内の製材工場で発生した端材などを障がい者就労施設で積木に製品化したものが、県内の幼稚園などに贈られます。この日の贈呈式では、駒林雅彦山形県農林水産部長が「積木でたくさん遊んで、大人になってからもずっと木に親しんでほしい」とメッセージ。園児たちは「みんなで大切に使います」と早速プレゼントされた積木を楽しみました。

祝・日本農業遺産認定 歴史と可能性探る「第2回紅花シンポジウム」

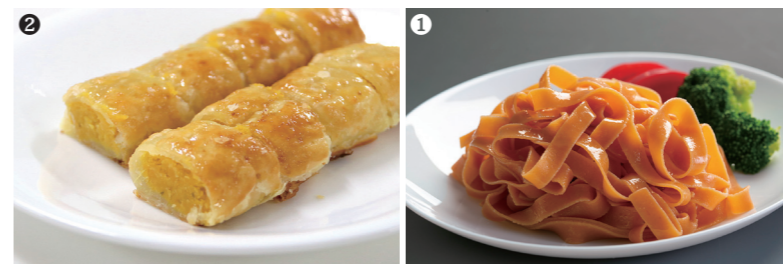
白鷹町「日本の紅（あか）をつくる町」連携推進本部（横澤浩本部長）が主催する「紅花シンポジウム」が2月27日、山峡紅の里で開かれ、紅花生産者や商工関係者など約120人が参加しました。

はじめに、このたび紅花の生産や加工システムが日本農業遺産に認定されたことを受け、横澤本部長が「受け継がれてきた紅花を未来へつなぐことも我々の役目。本日は紅花に対する意識を互いに共有し、理解を深めることで、今後の紅花

生産の意欲につなげてほしい」とあいさつしました。記念講演では、山形大学農学部 笹沼恒男准教授が、白鷹町を含む紅花栽培農家を訪れ調査を行なった結果を紹介。「現代の最上紅花は、かつてシルクロードを通り朝鮮半島から伝来した可能性が高い」「近代に欧州や中国から導入されたものではなく、恐らく江戸時代に栽培されていた最上紅花の子孫である可能性が高い」と説明しました。続いて町商工会の石川洋平主任が、「シラタカ・レッド商品」の販売状況と、今後予定しているインターネット販売の展開について報告。「日本農業遺産の認定は、今後の追い風になるはず」と期待を込めました。



1_よつばこども園の園児たちが、絵本「べにばなふしぎ」の朗読と「おどる！シラタカ・レッド」のダンスを元気に披露し、オープニングを飾った
2_「紅花のルーツを探す ～もがみべにばなのDNA解析から～」と題し、講演する笹沼准教授
3_シラタカ・レッド商品の今後の展望を示す石川主任。商品は昨年2月から約1年間で売り上げが500万円を超えるのではとの見込み
4_シラタカ・レッド新商品の見た目や味、食感を吟味する参加者



シラタカ・レッド新商品の紹介

- ①赤いフェットチーネ（割烹あかさか）
白鷹産トマトの濃厚なペーストを練り込んだ、モチモチとした食感の Pasta
- ②紅ほっこパイ（山口はすの会）
餡（あん）に、ほのかに赤い新種のサツマイモ「紅ほっこ」を使用したパイ

第6次総合計画策定へ まちづくり町民会議から町へ提言書を提出

町では現在、今後のまちづくりの基本的な方向性を示す新たな総合計画に向け、広く町民の皆さんの意見を頂戴しています。その手段の一つとして、このたび白鷹町まちづくり町民会議（以下「町民会議」という。）を設置し、全5回の会議が開催されました。

や今後の施策として重要と考える事項のほか、今後の施策を進めるための、若者が働きたくなる産業・ベンチャーへの支援の必要性、良い農作物が多い状況を踏まえた、付加価値の創出のための6次産業化の必要性など、具体的なアイデアが示されました。この提言を踏まえ、町では今後、新たな総合計画策定に向けて取り組んでいきます。



1_佐藤町長へ提言書を手渡す委員 2_会議の様子。町の強みや弱み、将来人口推計を踏まえた現状分析、将来像の検討、分野毎のアイデアの検討などについて議論してきた